

# 人格の心理的発達過程の検討

——人格心理学の方法論的基礎——

酒 井 博 世

## 1. は じ め に

人格とその発達の問題は、現代においては、教育学・心理学の主要な関心事となっている。たとえば矢川徳光氏は、「教育学は人間人格の全面的な発達＝解放を計画的に組織化する教育の実践ならびに理論についての科学である<sup>(1)</sup>」と規定し、又『国民教育小事典』(国民教育研究所編、1973、草土文化)においては「教育とは何かについて考えることは、集約していえば、人間人格の発達について考えることである<sup>(2)</sup>。」と説明されている。あるいは、G.ノイナーによる次のような指摘もある。「教育とは、人格の発達を目ざす意識的な影響の行使であり、人格がある目的に向かって変化していくその発達の条件を形成することを意味する<sup>(3)</sup>。」他方、伝統的心理学においてはルビンシュテインも指摘しているごとく、人格に関する心理学的研究は未開拓の部分が多い。しかし、にもかかわらず、「人格を心理学に導入することは、心理現象説明の必然的前提<sup>(4)</sup>」であり、この立場に立った心理学研究の成果も次第に生み出されつつある<sup>(5)</sup>。このような状況を見るとき、教育の問題は、人格の発達の問題との関連においてはじめて正しく設定し、かつ正しく解決することができるということができよう。

もちろん、人格とその発達の問題は、教育学や心理学のみの関心事ではない<sup>(7)</sup>。むしろ、人格とその発達の全体的構造は、諸科学の個別研究の深化とその総合の上に立ってのみ解明されうるものであろう。しかしながら、「外的影響の心理的効果を条件づけているところの、内的な心理的合法則性を研究するこ

と」を基本課題とする心理学（ここでは「心理過程の合法則性を理解するための内的諸条件の全総体」が人格としてとらえられている<sup>(8)</sup>）、あるいは、その心理学を前提としつつ、人格の能動的な変更と完成（＝人間人格の全面的発達）にかかわる実践と理論についての科学としての教育学は、他の諸科学の成果をその内にとり込みつつ、その研究対象の固有性の故に、人格とその発達の問題の解明に関して、独自の寄与をすることができるし、しなければならない。

人格とその発達の問題は、すでにふれたように現代における諸科学の共通の関心事となりつつある<sup>(9)</sup>。そしてそれとともに、その問題自体もさまざまな観点からとりあつかわれようとしている。なぜなら、すでにルビンシュテインも指摘しているごとく、多様な特性をもつ人格は、それを対象としようとする諸科学の固有の性格に応じて、独自の関連と関係の下に考察されうるからである<sup>(10)</sup>。しかしながら人格は、多様な特性をもちながら、なおそれらを統一したものととして全一的である。人格の諸局面は相互に無関係な属性として並列的にあつかわれるべきものではない。とりわけ人格は、その有機的＝生物的側面、社会的側面、心理的側面が、一面的に強調される傾向があったが故に、この点は重要である。それ故、教育学、心理学を含むいかなる科学も、人格の研究においては、前後のつながりのない事実のよせあつめとして人格をとらえるのではなく、体系的に、多くの諸要素との相互関係の中である事実を理解する哲学的・方法論的基礎を持たなければならない。そして問題は、いかなる哲学を方法論的基礎にすえるかということである<sup>(11)</sup>。もちろん個別科学を哲学に解消することはできないが、同時にそれは哲学なしには存在しえない。それ故に、人格に関する研究が、いかなる哲学を基礎にしてその研究をすすめるかは、その研究の科学性を確保する上で基本的な問題である。それ故、まず人格研究の哲学的・方法論的基礎について若干の考察を加えておく必要がある。

注(1) 矢川徳光「心理学的認識と教育学的認識」季刊『科学と思想』No. 4, 1972. 4, 新

- 日本出版社，62ページ
- (2) 『国民教育小事典』9ページ
  - (3) G. Neuner; *Sozialistischer Persönlichkeit, ihr Werden, ihre Erziehen*, Berlin 1975, S. 13.
  - (4) ルビンシュテイン『心理学』上，内藤・木村訳，青木書店，64ページ
  - (5) 同上，165ページ
  - (6) たとえば，ゴノボリン『心理学入門』新井・内野・上岡訳，新評論，1975，心理学研究会編『児童心理学試論』三和書房，1975，など。
  - (7) ソ連邦，ドイツ民主共和国等においては，全面的に発達した社会主義の人格の形成の問題が，あらゆる分野の科学者の共通の課題として提起され，共同研究がすすめられている。たとえばノイナーは，「人格の問題と教育学」という論文において，人格とその発達の問題に対する諸科学の際立った志向ぶりを示し，アナニエフは，人格に関する研究が，個別諸科学において深められていると同時に，多様な諸科学の総合の努力もなされていることを強調している。G. Neuner; *Das Persönlichkeitsproblem und die Pädagogik, D.Z.fPh.*, Heft 10/1973, S. 1157, B. G. Ananjew; *Der Mensch als Gegenstand der Erkenntnis*, Berlin 1974, S. 10.
  - (8) ルビンシュテイン『存在と意識』寺沢訳，青木書店，311，422ページ
  - (9) 現代日本においては，人格の破壊という否定的現象が深刻化する中で，人格に対する関心が強まっている，といえよう。
  - (10) ルビンシュテイン『心理学』上，171ページ
  - (11) 「自然科学者は，たとえどんな態度をとるにせよ，哲学に支配されているのである。問題はただ，彼らが支配されたいと思うのが劣悪な一流行哲学になのか，それとも思考の歴史やその成果を知ることのうえにたてられている理論的な一思考形態なのかということにすぎない。」（エンゲルス「自然の弁証法」全集20巻，大月書店，519ページ

## 2. 人格理論の方法論的哲学的基礎

真に科学的な人格の理論の哲学的・方法論的基礎を提供しうるのは，弁証法的・史的唯物論の立場に立つ哲学（マルクス主義哲学）であろう。なぜならばそれは，無限に多様な，生成発達過程にある具体的なものとしての人格を，全体として，諸条件との関連において統一的に把握することを可能にする。つま

りそれは、人格を、単に一般的・抽象的なものに終らせることなく、関係として、現実の対象の発展の論理において把握する視点を提供する。そして何よりもそれは、人格を、思弁の哲学者たちが考えるような諸個人に先験的に内在する抽象的なものとして説明しようとするのではなく、その現実形態から、すなわち社会的諸関係の総体との関連において理解すべきことを提起する。それは、人間有機体と社会的諸関係との深い統一において人格をとらえるべきであることを主張する。<sup>(12)</sup>

当然のことであるが、マルクス主義哲学は、人格を社会的諸関係の担い手としてのみ把握することを提起しているのではない。同じことであるが、マルクス主義は、人格に関する研究を社会的諸関係の研究によっておきかえることを主張しているのでもない。<sup>(13)</sup>それが人格を社会的諸関係との統一において理解することを提起するのは、人格の現実的な存在形態=多様な諸側面の統一体としての人格の物質的基礎をあきらかにするためである。人間は社会的諸関係の中に含み込まれていることによって、一定の社会的役割を演ずることを条件づけられている。人間は、生産者、労働力として生産の主体的要素を構成しており、しかもそのことによって「何か与えられたものとして眼前に見いだすところの生産諸力、諸資本および社会的諸交通形態」の総体から「ある特定の展開、<sup>(14)</sup>ある特殊な性格」が与えられる。人格内に形成される諸能力は、客観的・物質的条件との関連においてその具体的・現実的内容を獲得していくのである。<sup>(15)</sup>このようなものとして、我々は人格についての研究をすすめる場合、その人格の個体的・社会的な生活過程から切り離すかたちで研究をすすめてはならないのである。マルクス主義哲学が、人格の理論に対してまず示すことは、生きた具体的個人を、社会的諸関係との深い統一においてとらえるという視点である。とりわけ教育学や心理学が人格の問題を扱おうとする場合に、人格の個性や主観性に研究の重点がおかれることが多いだけに、人格の個性性、主観性を、社会的な現実的生活過程との統一において把握すべきであるとする上述の視点は重要である。

ところで、我々が生きた具体的個人を社会的諸関係との統一において理解しようとする時に注意しなければならないことは、社会的諸関係を、人間をとりまく外的な物質的条件として人間個人に対置させ、相互に無関係な独立したものととして両者を扱ってはならないということである。環境が人間をつくるのと同様に、その環境は人間によってつくられるのであって、そもそものはじめから、「純粋な」人間と「純粋な」環境とがあったのではない。前者が後者を条件づけると同時に後者が前者を条件づけるというこの両者の関係は、まさに統一的に、弁証法的に把握されなければならない。この点を考えるとき、人格の理論はまさに弁証法という方法論的支柱を必要とするのであり、この点に関してもその方法論的基礎を提供しうるのは、弁証法的唯物論としてのマルクス主義哲学であろう。

さて、人格の理論に関するマルクス主義哲学の役割は、方法論的基礎を提供することにあつた。しかしそのことは、マルクス主義哲学が、人格に関する理論を哲学の力のみによって完成した形で提供することができるということを意味しているのではない。そのことは、人格に関する個別諸科学の独自の観点からの研究の意義を何ら低めるものではない。<sup>(16)</sup>

この点に留意しつつ、初期マルクスの著作に示される人間についてのマルクスの思想を学ぶならば、そのことは我々の人格研究へ貴重な出発点を与えてくれるであろう。何故なら、とりわけ初期著作の一つである1844年の『経済学・哲学手稿』においてマルクスは、人間に関する問題を直接にその中心課題としてとりあげ、主体としての人間と客体としての自然・社会との弁証法的関係についての考察を展開しているからである。<sup>(17)</sup>

注⑫ 残念ながら、我々の目にふれる限りにおいて、マルクス主義哲学の立場からの人格に関する哲学的=世界観的、方法論的説明は、議論の活発なわりには体系だったものとして示されているとはいえない状況である。だがそのことは、マルクス主義哲学が、人格に関して全く無力であることを示すものでは決してない。教育学・心理学をはじめとする諸科学の人格研究の進展に応じて、その成果を大胆にとり入れ

た哲学的研究もあらわれつつある。我々はそのような成果の一つとして、L. Seveの *Marxisme et théorie de la personnalité*, Paris, 1969, をあげることができるであろう。なお、その内容については、モーリス・カヴァン「マルクス主義と人間の人格」(宇波訳『心理学とマルクス主義』1974, 福村出版, 所収)と池谷寿夫「史的唯物論と人格理論」(『唯物論』No. 3, 1974. 11, 汐文社, 所収)及び拙稿「人格概念の検討」(『名城商学』Vol. 25, 人文科学特集, 1976. 3, 所収)等参照。

- (13) この点についてはすでにルビンシュテインが、資本論におけるマルクスの人格規定にふれつつ、「人物を人格化された社会的カテゴリーとしてしか」見ないことの不当性を指摘している。(ルビンシュテイン『心理学』上, 169~170ページ)
- (14) マルクス=エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」全集3巻, 34ページ
- (15) 「個人の現実的な精神的ゆたかさが彼の現実的諸連関のゆたかさにまったく依存する……。」(同上, 33ページ)

- (16) 周知のとおり、ルビンシュテインは、次のように諸科学の独自の立場からの人格研究の意味をあきらかにしている。「人間は、人格としては、社会的諸関係の体系のなかの『単位』として、これらの諸関係の現実的な担い手としてあらわれる。この点に、人格の概念は、社会的カテゴリーであって、心理学的カテゴリーではない、と主張する見地の積極的の核心がある。しかしながら、このことは、多彩なる特性をもつ——社会的特性ばかりでなく、自然的特性をもつ——実在としての人格自体は、さまざまな科学の研究対象であって、それらの科学のおのおのは、それ独自の関連と関係から、人格を究明するというを斥けるものではない。心理学が必然的にこれら科学の一つであるのは、心理のない人格はなく、そのみか、意識のない人格はないからである。」(前掲『心理学』上, 171ページ)

「人間の心理学の研究にさいしてわれわれは、自然的なもの和社会的のものとの緊密な相互関連を取り扱うことは疑う余地はないが、それらの相互関係にかんする問題の解決は、たんに全ての科学の融合でなく、まず問題のいろいろな局面の入念な区別やはっきりした分析を必要とするのである。社会的諸現象と社会的諸科学について語るには、何よりもまず、社会にかんする科学と、社会的に制約された諸現象にかんする科学とを区別しなければならない。……一言でいえば、人間、その心理における自然的なものとの絡み合いと相互関連を明らかにするには、一般的公式では不十分であり、具体的分析が必要である。」(同上, 下, 35~36ページ)

- (17) 矢川徳光は、教育学の立場から、マルクスの初期の著作に学ぶことの必要性和、その立ちおくれを指摘している。(前掲『科学と思想』No. 4, 所収論文, 51ページ参照)

### 3. 『経・哲手稿』と人格理論

人格とその発達に関する我々の問題にとって出発点とすべきマルクスの思想を『経・哲手稿』から学ぶとすれば、さしあたり次の諸点を整理することができるであろう。

まず第1に、人間理解の基本的視点として、人間を実践的なものとして、対象的活動において把握するということである。マルクスは、「ヘーゲル現象学とその終極成果とにおける偉大なもの」を、ヘーゲルが「現実的な」人間を「人間自身の労働の成果として理解する」ところにみてとり、つづけて次のように述べている。「……人間が、……人間的存在としての実を示すことは、ただ次のことによつてのみ可能である。すなわち、人間が現実的にそのすべての類の諸力を外へ出すこと——これはまた人間たちの総活動によつてのみ、歴史の成果としてのみ可能であるのだが——……によつてである。」<sup>(18)</sup>人間を、人間<sup>(19)</sup>の実践的活動を通して理解するというこの視点は、周知のとおり1845年の「フョイエルバッハに関するテーゼ」において明確に定式化されている。<sup>(20)</sup>

ところで、人間の実践的活動・労働は、根源的には、人間が本来自然の一部として、「直接に自然存在である」ことにその原動力をもっている。「自然存在として、しかも生きた自然存在として、彼は一方では自然的諸力、生の諸力をそなえており、一つの活動的な自然存在であつて、これらの力は彼のなかに諸諸の素質や堪能性として、衝動として現存している。」<sup>(21)</sup>だが、自然的諸力としての活動性は、人間においてはそのまま自然的なものとして無媒介的に直接にあらわれるものではない。「しかし人間はただ自然存在であるばかりでなく、人間的な自然存在である。すなわち自己自身にとってあるところの存在、それゆえに類的存在である。」<sup>(22)</sup>ここでマルクスが「類的存在」というのは、「人間が自己をその主観的個人性より以上に高めると言うこと、人間がおのれにおいて客観的普遍を認識し、このようにして有限な存在としておのれを越えると言う

ことである。<sup>(23)</sup> 人間は自己の自然的個別性に一面的に支配されるのではなく、その自然的個別性を、普遍的なものとの統一において表現することができる。そのような類的存在としての実を示すことができるのは、人間の「その有<sup>ザイン</sup>において」であり又「その知において」でもある。人間は、己れの存在を意識や意欲の対象にすることができ、しかも意識的活動の主体として、自己を示す。人間の活動は、自然的衝動によって直接規定されるものではなく、意識的活動として、意識によって媒介されたものとしてあるのである。<sup>(24)</sup>

第2に、人間の実践的、対象的活動は、単に対象変革、外的世界の変革をもたらすだけでなく、活動の主体たる人間自身の変革への契機になっている、ということである。この視点は、フォイエルバッハに関するテーゼ<sup>(25)</sup>第3や資本論における労働規定においてより明確に示されているものである。マルクスは次のように述べている。「人間の本質の对象的に展開された富をとおしてはじめて、主体的人間的な感性の富、音楽的な耳や形態の美にたいする目や、要するに人間的享楽を能くしうる諸々の感覚、すなわち人間的な本質の諸力として確証される諸々の感覚が、はじめて発達させられたり、はじめて産出されたりするのである。なぜなら、五感だけでなく、いわゆる精神的感覚、実践的感覚(意志、愛、等々)もまた、一言でいえば人間的感覚、感覚の人間性もまた、その対象の現存在によって、人間化された自然によって、はじめて生成するからである。……すでに生成した社会は人間を、彼の存在のこの富全体において生産する、すなわち、すべてのかつ深い感覚をもった豊かな人間を、その社会の恒常的現実として生産する。<sup>(26)</sup>」マルクスによれば、人間的活動・労働が結果として生み出す産物—対象の世界は、「人間の本質」(人間的諸力)が対象化されたものであり、そのようなものとしてそれは、同時に活動主体たる人間の諸発達を条件づける。主体と対象的世界の関係は、先験的な「純粋な活動」が対象の変革、対象の創造を生み出すという一面的関係においてとらえられるべきものではなく、自らが生み出す対象的世界との関係において、自らもまた制約されるのである。両者は弁証法的関係において把握されなければならない



(27)  
ない。

第3に、主体と対象の世界との弁証法的統一を実現する契機の問題である。人間と対象的世界の弁証法的統一は、決して無媒介的な直接的なものではない。この点についてマルクスは次のように述べている。「世界にたいする彼の人間の諸関係の各々、すなわち、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触感する、思考する、直観する、感覚する、意欲する、活動する、愛すること、要するに彼の個性のすべての器官は、……その対象的ふるまいにおいて、すなわち対象にたいするふるまいにおいて、対象を我がものとする獲得である。<sup>(28)</sup>」ここに示されているように、人間と対象的世界との統一を実現する契機は、対象に対する人間の能動的な、しかも「全面的な」ふるまい（Verhältnis）なのであり、その契機を通して結果として実現されるのが、人間主体と対象的世界の統一、主体による対象の「獲得」（Aneignung）なのである。

注18) マルクス『経済学・哲学手稿』藤野訳、国民文庫、216～217ページ

19) マルクスにおいては、人間の実践的活動の基本的形態は労働であった。労働は、人間の肉体的・精神的諸力の発現であるが、人間の活動すべてではない。しかし労働は人間の肉体的・精神的諸力の再生産のための物質的条件を保障する。と同時にそれは人間の諸力の変革・形成の過程でもある。この二重の意味において労働は「人間生活の永久的な自然条件」であり、人間の実践的活動の基本形態である。（マルクス『資本論』第3篇第5章第1節労働過程、参照）

20) 「これまでのあらゆる唯物論の主要欠陥は対象、現実、感性がただ客体の、または観照の形式のもとでのみとらえられて、感性の人間的な活動、実践として、主体的にとらえられないことである。……彼（フォイエールバッハ）は人間の活動そのものを対象的活動としてとらえない。」（第1テーゼ、全集3巻、3ページ）

21) マルクス『経・哲学手稿』222ページ

22) 同上、224ページ

23) 同上訳書所収、仏訳者の脚注より、259ページ

24) 「動物はその生活活動と直接に一つである。動物はその生活活動と区別されない。動物はその生活活動である。人間は彼の生活活動そのものを、彼の意欲および彼の意識の対象とする。人間は意識的な生活活動をもっている。それは、人間がそれと直接に融合するような被規定性ではない。意識的な生活活動が人間を動物

的生活活動から区別する。まさしくこれによってのみ人間は一つの類的存在である。」(同上, 106ページ)

25 「環境の変更と人間の活動または自己変革との一致はただ革命的実践としてのみとらえられうるし、合理的に理解されうる。」(全集3巻, 4ページ)

26 マルクス『経・哲手稿』154~155ページ

27 同上, 222ページ参照

28 同上, 151ページ

#### 4. 人格の心理的発達過程研究の方法論的基礎

マルクスの理論を人格の心理的発達過程の研究において継承しようとする場合まず考えられることは、人格の内的心理的活動を社会的なものによって規定されたものとしてとらえるという視点である。しかし心理の社会的被規定性を承認しつつその規定の仕方についての具体的な把握においては基本的に異なる二つの方法・態度が存在している。一つはレオンチェフ、エリコニンらに代表される「ヴィゴツキー学派」と呼ばれる人々による「内面化」論<sup>(29)</sup>であり、それは外的なものによる内的心理的活動の直接的規定性を問題にする。今一つは、コシューク、ルビンシュテインらに代表されるもので、外的なものは内的諸条件に媒介されて作用するという見解である。

「内面化」論の基礎を確立したのはヴィゴツキーであると<sup>(30)</sup>されている。それ故我々の検討もヴィゴツキーから始めたいと思う。

##### (1) 心理的発達の社会的発生——ヴィゴツキー——

ヴィゴツキーがあきらかにしようとしたのは、外的操作の内的操作への「転生」、つまり人間の外的行為手段としての“記号”の歴史的発達と、その“記号”による人間の高次心理機能の被媒介性、およびそれを実現させるための“記号”の獲得(外的なものから内的なものへの転生の過程)の問題であった。ヴィゴツキーの理論の基本的特徴の第1は、高次精神機能を、歴史的に発達してきた“記号”によって媒介された過程としてとらえることにある。「ここでは

その詳細な説明はしないが、研究の示すところによると、すべての高次の精神機能は、被媒介的過程であるという共通の特徴をもつ。すなわち、それらは、その構造のなかに過程全体の中心的・基本的部分として精神過程の方向づけや支配の基本的手段としての記号の使用をふくむのである<sup>(31)</sup>。そしてヴィゴツキーは、このような高次精神機能における“記号”の媒介機能は「労働活動における道具の役割に類似<sup>(32)</sup>」しているとして、「記号の道具的機能」を考えている。だがヴィゴツキーが記号の使用と道具の使用という二つの近似的概念を用いるのは、決して単なる比喩的現象的表現のためでも、あるいはまた両者の機械的同一視のためでもない。ヴィゴツキーは、記号と道具が媒介的活動という一般的概念においてその類縁性が示されること、しかし他方で、前者が人間の心理的・内面的活動の手段であるのに対して後者が人間の外的活動の手段であるということによる両者の本質的相違をふまえて、なお「記号の道具的機能」つまり記号の媒介機能を道具の媒介機能との類似という側面から理解することの積極的意義を、記号の使用と道具の使用という活動の現実的関連、すなわち記号と道具の発達の現実的関連においている。

ヴィゴツキーは、人間による道具の生産と使用が人間の生物学的（動物的）限界をのりこえることを可能にする、ということに注目していた。彼は、ジェニングスによる心理学への「活動性の体系」という概念の導入を紹介したが<sup>(33)</sup>、ジェニングスのいう活動性の体系とはおのおのの動物が所有する行動（活動性）の方法や形態は、動物の器官や組織に制約された体系を示しているという事実であった。人間もまたこのジェニングスの示す一般法則から免れるものではない。人間も、彼の行動方法はその「活動性の体系」によって一定の限界をおかれている。人間自身は飛ぶことができない。しかしながら、人間における「活動性の体系」は、動物におけるそれとは異なる質をもっている。それは人間に独自の、人間的な「活動性の体系」である。ヴィゴツキーによれば、この人間的な「活動性の体系」の発達にとって決定的な意義をもっているのが道具の使用であった。「人間は、道具を使って自分の活動性の範囲を無限に広げるとい

う点で、あらゆる動物を凌駕する。人間の脳と手が、かれの活動性の体系、すなわち、行動の可能な領域および形態を、無限に拡げるのである。それゆえ、子どもに可能な行動形態の範囲を決定するという意味において、子どもの発達における決定的モメントとなるのは、道具を自主的に使用し発見する道に歩みだす第一歩である。<sup>(34)</sup> 道具の使用は、人間の生物的・有機的制約を変更し、人間的な、新たな活動性の体系への移行を可能にする。この人間的な活動性の体系への移行は、しかし古い、有機的、生物的なものが支配する活動性の体系が完全にその発達を終えた後に現われるものではない。人間的な活動性の体系の形成、すなわち人間的発達は、個体発生的にみるならば、人間のもっている生物的・有機的條件の発達と無関係に切り離された所で進行するものではない。とりわけ人間の心理的・精神的発達においてもそうである。ヴィゴツキーは、「高次の〔精神機能の〕構造において機能的決定的全体となるもの、あるいは全過程の中心となるものは、記号とそれの使用方法である」<sup>(35)</sup>と述べているが、このような意味で人間的活動体系において主要な位置を占める高次精神機能の発達——それは記号の使用法の獲得と結びついているのだが——は、道具の使用——より一般的概念で表現するならば、人間の外的活動——による人間の有機的・生物的條件の変革の過程と密接な関連をもっているのである。こうしてヴィゴツキーが、記号の媒介機能と道具の媒介機能との類似を指摘したことは、決してたんなる現象的比喩的表現にとどまるものではなく、両者の発達を統一的に理解するという基本的な視点を基礎においていた<sup>(36)</sup>のである。

ヴィゴツキーにとっての根本問題の第2は、この精神的・心理的活動の「手段」としての記号が、個体においてどのようにして形成・発達していくのか、獲得されていくのかという問題である。ヴィゴツキーは発達を基本的に、変革、飛躍的・革命的変化としてとらえる。もちろんそれは一定の漸進的進化を前提とするが、発達のパターン全体においては、変革期における飛躍というものがある一定の点としてとらえられ特別な意義が認められる。この観点は、個体における記号の発達を、個体内の諸条件の漸進的成熟、内的潜勢力の展開の結果とし

て理解するという観点の変更を可能にする。すなわちヴィゴツキーは個体における記号の発達を「有機体と環境との現実的出会いと環境への生き生きした適応<sup>(37)</sup>から」、外的要因と内的要因の衝突、相互関係から説明する。記号は、最初は常に社会的結合の手段であって、人間相互のコミュニケーションの手段として社会的・外的形式をとって発達してきた。記号は発生的には人々の中の現実的関係を媒介する手段である。このような「精神間的」関係を媒介する機能をもっている記号が、個体における「精神的」機能——すなわち心理的・精神的活動の媒介手段としての機能——をはたすものとして「心内化」されること、つまり精神過程に転化されることが、高次の心理的・精神的活動の発生的基礎である。記号の個体内における発生過程をこのようにとらえて、ヴィゴツキーはより一般的に心理的・精神的発達の発生的基礎を「外から内への移行」という道すじにおいて理解する定式を次のように示している。「われわれは、文化的発達の一般的発生的法則を次のように定式化することができよう。子どもの文化的発達におけるすべての機能は、二度、二つの局面に登場する。最初は、社会的局面であり、後に心理学的局面に、すなわち、最初は精神間のカテゴリーとして人々のあいだに、後に精神的カテゴリーとして子どもの内部に、登場する。」<sup>(38)</sup>ここからヴィゴツキーの理論の第3の特徴が示される。つまり彼は、人間の心理的・精神的発達の社会的発生について語っているということである。<sup>(39)</sup>人間の精神機能は、有機体の外に存在する社会的諸関係が個体の内面に転化されたものである。このようなものとして「人間の心理学的本性は、社会的諸関係の総体であり、内面に移され、人格の機能とかその構造の形式となった社会的諸関係の総体である。」<sup>(40)</sup>

注29 「ソヴィエト心理学では内面化という。概念は、普通、ヴィゴツキーと彼の後継者達の名前と結びついており、この過程の重要な研究はかれらによって行われている。」（レオンチェフ「心理学における活動の問題」『ソヴィエト心理学研究』ソヴィエト心理学研究会編、No. 16、三友社、1973、15ページ）

30 「心理活動を外的活動の内化とする構想は、われわれのなかで最近、ヴィゴツキー

の『方向』だとされている。(ルビンシュテイン『心理学』下, 91ページ)

31) ヴィゴツキー『思考と言語』上, 柴田訳, 明治図書, 176ページ

32) ヴィゴツキー『精神発達の理論』柴田訳, 明治図書, 126ページ

33) ヴィゴツキー『精神発達の理論』第1章12. 人間における活動性の体系

34) 同上, 46~47ページ

35) 同上, 170ページ

36) このことは、ヴィゴツキーが人間の発達の基本的性格を「文化的一生物学的パラドクス」と表現しつつ、人間の生物学的・有機的発達と精神的・文化的発達とを機械的に対置させたり、一方を他方に一面的に従属させたりしないで、両者の原則的相違をふまえつつなお一つの過程において統一させてとらえることによって人間人格の発達を理解しようとしていたことを意味する。これは、後に見るレオンチェフの理論との相違という問題にとって重要である。

37) ヴィゴツキー『精神発達の理論』200ページ

38) 同上, 212ページ, 『思考と言語』上, 270ページ

39) 人間の精神的発達を、社会的関係が精神機能へ転化する方向においてとらえようとするヴィゴツキーの見解に対して、J. ピアジェは発達を社会化の方向においてとらえようとする。ヴィゴツキーとピアジェのこの見解の相違は、子どもの言語発達を「社会的言語から個人的言語へ」の方向で見るか「内々の個人的なものから社会的なものへ」の方向で見るかという有名な論争において具体的に示されている。なおピアジェの子どもの言語発達に関する研究は、ピアジェ「子どもの言語と思考」大伴訳『臨床児童心理学』I「児童の自己中心性」参照。またピアジェに対するヴィゴツキーの批判は、ヴィゴツキー『思考と言語』第2章「ピアジェの心理学における子どもの言語と思考の問題」があり、この批判に対するピアジェ自身のコメントは、『思考と言語』の英訳が出版されたとき(1962年)附録として公表されている。

40) ヴィゴツキー『精神発達の理論』213ページ

## (2) 「内面化」論——レオンチェフ——

外的な物質的な形態で存在する記号が、内面的・心理的活動の媒介機能をはたすものとして個体内に転化されるというヴィゴツキーの理論は、レオンチェフらにおいて心理発達に関する「内面化」論として継承された。レオンチェフによれば「内面化」とは、外的な物質的な諸過程の「知的平面」「意識の平面」の諸過程への移行のことをいう。この移行の過程つまり「内面化」の過程は「外的活動が、前からある内面的な《意識の平面》に置きかえられる過程ではな

い。これは内的平面が初めて形成される過程である。<sup>(41)</sup> 「内面化」論の特徴は、人間の内的心理的活動は、外的なもの内面への移行の結果はじめて形成されるものであるとする点にある。<sup>(42)</sup> そしてこの「内面化」論は、更に一般化した形で、諸個人の発達一般を、諸個人がまず自分の眼前に見出す文化に対象化されている人間の諸能力を、自らの内面に再生産する過程として説明する。<sup>(43)</sup>

レオンチェフらの「内面化」論の特徴は、人間の内面、心理活動が形成される過程を説明する原理としてそれが考えられていることである。そしてさらに重要なことは、彼らによれば、人間の精神的・心理的発達の源泉は対象的存在として人間の外部に客観的に存在するのであり、諸個人の内的発達過程そのものが、外的なもの内面化の過程として把握されていることである。エリコニンは次のように述べている。「人間的な対象、言語、科学、文化のなかには、それまでの人類の発達の全経験が堅く打ちつけられている。この世界のなかには、子どもの発達の進行の中でかれのなかに発生しなくてはならぬところの行動様式、才能、人格の特質のすべてが出来合いの形で含まれている。エリ・エス・ヴィゴツキーが正しく指摘しているように、環境と子どもの発達の間にある関係の特殊の特質は、発達の進行につれて発生し発達の結果において受けとらなくてはならぬものが、すでにそもそも始めから環境のなかに与えられている、ということにほかならない。子どもの人格の発達、また人格の特殊人間的な諸特性の発達にたいし、環境は発達の舞台装置としてその条件として現われてくるのではなく、発達の源泉として現われてくるのである。」<sup>(44)</sup> この見解にもとづけば、子どもの精神的・心理的発達の過程は、人間的対象の世界に存在するものの自己への同化あるいは獲得の過程として把握されることになる。この見解は、『経・哲手稿』に示されたマルクスの思想の心理学への直接的適用であるとみることができる。すでに考察したように、『経・哲手稿』においてマルクスは、労働による「人間的本質諸力」の対象化と、対象化された人間的な本質諸力による人間的感性一五感の形成の問題について論じた。そのことと心理学とをかかわらせてマルクスは次のように述べている。「産業の歴史

と産業の生成し終った対象的存在とが、人間的な本質諸力の開かれた書物であり、感性的に提示されている人間的な心理学であることは明らかである。……心理学にとってはこの書物が、したがってまさに歴史のうちで感性的にもっとも身近かで近づきやすい部分が閉じられているのだが、そのような心理学は現実的な、内容豊かな、実在的な科学となることはできない……。」レオンチェフらはこの指摘をうけて、人類の系統発生的発達において達成された水準の個体における再生産の過程、すなわち対象化されている人間的諸能力の個体による獲得の過程こそが個体の発達のメカニズムを説明する原理であるとしたのである。

こうして、レオンチェフらによれば、個人の外部に存在するところのもの——対象化された人間的諸能力こそ人間の個人的発達の根源であって、人間の内的条件、自然的・生物的条件は発達にとって何ら規定的要因にはなりえない。現世人類（ホモ・サピエンス）においては「社会—歴史的な法則が人間の発達を制御する唯一のものとなつて<sup>(47)</sup>」のである。自然的・生物的条件は特殊人間的諸能力の発達・形成にとって必要不可欠の前提条件ではあるが、それ以上のものではなく人間的諸能力の質を規定するものではありえない。エリコニンは、レオンチェフの「社会—歴史的な法則が人間の発達を制御する唯一のものとなつている」という命題を敷衍して次のように述べている。「それぞれの与えられた瞬間において到達された子どもの身体的発達の水準、子どもの高次神経活動の諸特質が、社会の成員としての子どもの発達、かれの心理および意識の発達にとって必須な条件となつている。もちろん、それらは心理的発達の条件として必要なものであって、それらが子どもの心理発達の進行をも、その水準をも、それ自体として予め決定するものでないのはいうまでもない。……動物界で行なわれている発達過程から類推して、子どもの発達も適応の過程だとみなされる。両者の相違といえば、それはただ、動物は生活の自然的条件に適応するのだが、人間は先行する世代によってつくられた、生活の社会的条件に適応する、つまり、自然的環境ではなく人工的環境に適応する、ということ



(48)  
だけである。」

注41) レオンチェフ『心理学における活動の問題』16ページ

42) 「内的思考過程は外的実践的活動の内化および特殊な転形の結果以外の何ものでもない。」(レオンチェフ『カール・マルクスと心理科学』秋山訳、季刊『国民教育』No. 3, '70年冬季、所収、233ページ)

43) 子どもの発達過程は「歴史的に形成された人間の特性、能力および行動様式を個人が再生産するところの過程である。」(レオンチェフ『子どもの精神発達』松野・西牟田訳、明治図書、107ページ)

44) エリコニン『ソビエト・児童心理学』駒林訳、明治図書、25～26ページ

45) マルクス『経・哲手稿』156ページ

46) この「獲得」という概念は初期マルクスの用語 *Aneignung* である。レオンチェフらの「内面化」論はこの「獲得」概念を中心概念にしているのであるが、これに対してルビンシュテインは、マルクスにおける「獲得」概念は私的所有の積極的揚棄としての共産主義と結びついた概念であって、発達過程を説明する概念とは別ものであり、それ故この概念を機械的に心理学に導入することは誤りであることを指摘している。(ルビンシュテイン「能力の問題と心理学理論の諸問題」『ソビエト心理学研究』No. 20, 1975, 5～7, 13ページ)

なお、*Aneignung* は、生理学用語としては「同化」である。この「同化」という概念を用いて人間の発達過程を説明しようとしている代表的研究者はピアジェである。(Goldman, Lucien: *La Psychologie de Jean Piaget*, Paris, 1959.)

47) レオンチェフ「人間と文化」『人間・文化・民族の心理——現代ソビエト心理学論集』世良正利編、三友社、1972、22ページ。レオンチェフのこの命題は明らかに一面的である。人類の系統発生的発達の水準が高度になり、いかなる社会が形成されようと、人間が「肉と血と脳髄をそなえたままで自然の一部」であり、「自然と一体である」という根源的事実に変化はないのである。それ故そのようなものとしての人間の発達、自然的なものと社会的なものとの弁証法的関係において規定されるとみるべきであろう。(エンゲルス「猿が人間になるについての労働の役割」参照)

48) エリコニン『ソビエト・児童心理学』25ページ

### (3) 「内面化」論の批判的検討

#### ——ルビンシュテイン、コスチュークの見解を中心に——

ここで我々は、レオンチェフらの「内面化」論とヴィゴツキーの理論との相違について若干触れておきたいと思う。ヴィゴツキーは必ずしも外的要因による人間の内的・心理的活動の一義的規定ということ述べているわけではないからである。例えばヴィゴツキーは、子どもの知的発達、外部からの働きかけに対する機械的結果として生ずる過程なのではなく、教授過程に示される外部からの働きかけは、一連の内的発達過程を開始させるにすぎないのであって、実際の内的発達は独自の発達のすじ道をとることを示している。そしてその独自の内的な発達のすじ道をあきらかにすることこそ子どもの心理学的研究の主要課題であると指摘している<sup>(49)</sup>。

ヴィゴツキーが発達の過程の独自の内的論理を強調していることをとらえて、コスチュークはヴィゴツキーの思想を次のように継承しようとしている。「……ヴィゴツキーによれば、教授—学習過程と発達過程は同一なのではなく、その関係は複雑な動的相互関係においてあるのであり、これらの相互関係はただ単に教授—学習の内容や方法によるだけでなく、児童の年齢や彼らの個人的諸特質によって媒介されているのである。……知的発達は……それ自身の内的論理をもっている。この内的論理を明らかにすることが、人間の心理の個体発生の理論の最も重要な課題の一つである……。」<sup>(50)</sup> コスチュークによるヴィゴツキーの継承の仕方と、レオンチェフらのそれとの間には明らかな相違が存在する。前者は発達の内的論理を強調し、後者は発達を外から内へのすじ道において理解しようとする。この相違はどこから生ずるのであろうか。それはまず人間の内的心理現象の社会的被規定性の理解に関する相違から生ずるように思われる。すなわち、対象的世界の「内面化」の過程が人間の内的心理的活動の形成の過程であるとするレオンチェフらの「内面化」論は、その基礎には、人間の内的心理的活動の外的なものによる直接的被規定性という見地を保持している。これに対してコスチュークは、発達の内的論理を強調し、外部的条件の

発達に対する一義的な主導性を否定して外部的条件と内部的条件の複雑な相互関係ということを重視する。もちろんコスチュークも、究極的には人間の内的心理的発達が社会的に制約されているものであることを否定しない。しかしコスチュークにとって重要なのは、発達の外的条件に対する依存関係の弁証法的理解であった。彼はレーニンの見解に依拠しつつ次のように述べている。「レーニンは論文『弁証法の問題によせて』において次のように書いている。『発展（進化）についての二つの根本的な（あるいは二つの可能な？あるいは歴史においてみられる二つの？）考え方は、増減、繰返しとしての発展と、対立の統一としての発展（統一的なものが互いに排除しあう対立物へ分裂すること、および両者の相互関係）である。運動について第一のような考え方をすると、自己運動、その推進力、その源泉、その原動力が見えなくなってしまう。あるいはその源泉が外部に——神、主観等々——移されてしまう。第二の考え方によっては、おもな注意はまさに、『自己』運動の源泉の認識にむけられる。

後者、すなわち弁証法的唯物論は、自然、社会および人間の精神のあらゆる現象および過程についての発展の理論である。<sup>(51)</sup>』

発達についてのこの考え方は、人間人格の形成過程を内的条件と外的条件との相互関係の中で規定される自己運動として理解するカギをわれわれにあたえている。内的条件は、発達する有機体そのものとその構造および機能の中に、また有機体と環境との相互作用の過程で形成される生理的・心理的特質の中に含まれている。外的条件——これは、有機体の存在、有機体の特質の形成および出現、その生命活動の発達に不可欠な環境条件である。外的諸条件は、内的諸条件を通して発達に作用する。<sup>(52)</sup>……」

コスチュークの見解にみられる「外的諸条件は内的諸条件を通して発達に作用する」という命題は、周知のとおりコスチュークだけのものではなく、ルビンシュテインの示した命題としてよく知られているものである。ルビンシュテインは、「外的原因は内的諸条件（それ自身が外的影響の結果として形成される）をとおして作用する、と主張する、弁証法的＝唯物論的な決定論の構想の

基本的一般的特徴<sup>(53)</sup>は、心理現象にも適用されうるとして「主観への外的影響の心理的效果を媒介している内的心理的諸条件、および、外的に条件づけられている心理活動の内的合法則性」を説明することを「心理学の基本課題」とし<sup>(54)</sup>ている。心理現象は「主体としての人間と客観的世界との相互作用によって規定せられる<sup>(55)</sup>」のであり、心理現象の客観的世界への依存関係は「その成果としてこの現象が生まれるところの心理活動によって媒介されている<sup>(56)</sup>」のである。

コスチューク、ルビンシュテインらのこうした見解からすれば、レオンチェフらの「内面化」論は、非弁証法的で機械論的性格をもつことになる。ルビンシュテインは「内面化」論を批判して次のように述べている。「人間の思考や人間の能力の社会的被制約性についての正しい命題は、内化理論においては外的なものとの内的なもの、社会的なものとの自然的なものとのあらゆる弁証法を駆逐するところの社会的規定性の機械論的な把握<sup>(57)</sup>によっておおわれてしまう。」人間の内的心理的活動を、外的なものとの内面化の結果形成されるものと把握する場合には、意識的あるいは無意識的に、外的なものとの心理的ものを機械的に対置させることになる。

これに対してレオンチェフは、ルビンシュテインの「外的条件は、内的条件を通して作用する」という定式は、心理学の方法論における2項分析図式（S→Rという図式で直截的に表現される）を否定し外的作用の効果は外的作用の主体による屈折に、すなわち主体の内的状態を特徴づけている心理的「仲介変数」に依存するという事実を強調するためのものであるが、もしこの定式がいう内的条件が、外的作用を受けている主体のその時の状態を意味するのならば、この定式はS—R図式に原則的には新しいものを何もつけ加えたことにはならない、とルビンシュテインの定式の有効性、方法論的意義に否定的見解を示している。そしてレオンチェフ自身は、2項分析図式の機械性を真に克服する方法として、客体と主体を媒介する中間項＝「主体の活動とそれに応じた条件、目的および手段<sup>(58)</sup>」を導入した3項図式を提起する。すなわちレオンチェフによれば、客観的なもの、外的なものは、活動を通して主観化されるのであ

る。

レオンチェフのこの見解は一見ルビンシュテインの見解と矛盾しないように思われる。事実ルビンシュテインもまた、具体的実践的活動を通して心理過程が実現、形成されていくものであることを指摘している。<sup>(59)</sup>だがレオンチェフとルビンシュテインにおける活動概念を決定的に異ならせるものは、その活動を心理現象、主体の内的条件とどのように関係づけて理解するかという点である。ルビンシュテインは、心理的要素を全く除外した「外」的活動によって心理（主体）と対象（客体）が媒介されるという思想を二元論的であるとして、心理的過程そのものが、人間的活動の主要な要素であると同時に具体的な活動を通して形成・発達していくという一元論的把握の立場に立っている。これに対して、レオンチェフにとって“活動”という概念が重要なのは、それが主体と対象の世界との実践的接触を実現させる過程であるからであり、この過程を通して心理的反応が形成されるという点にある。つまりレオンチェフにとっての活動は過程としての、媒介機構としての側面が主要なのである。例えばレオンチェフは次のように述べている。「……主体と現実世界との結びつきを媒介する過程、主体による実在の心理的反映の行なわれる過程、物質的なものの観念的なものへの移行……これが主体の活動の過程の本質である。最初は常に外的で実践的な活動であるが、後に内的な活動、意識の活動の形式を獲得する過程である。」<sup>(60)</sup>このようにレオンチェフは、活動と内的心理的条件との依存関係を無視し、もっぱら活動による心理現象の形成という結果的側面のみを強調する。レオンチェフにとって活動は、内的心理的条件に依存することのない外的なものとして基本的なものである。<sup>(61)</sup>それ故、この外的活動を制御するのは、第一義的には外的なものによるのであって内的心理過程によるのではない。こうしてレオンチェフは「外的諸過程が内的・知的過程に発生的に先行している、という命題」<sup>(62)</sup>を確立させ、外的諸過程から内的諸過程への移行の過程を説明する「内面化」論の基礎にしたのである。

しかし、ルビンシュテインの見解とレオンチェフの見解を比較すれば明らか

であるが、レオンチェフの見解は、人間の内的心理的過程の発生を結果的にとらえてはいるが、その発生・形成の過程を複雑な相互関係の下に明らかにしているとはいえない。それは「ただその結果的表現、この過程が進んでいく方向の特色づけであるにすぎない。」<sup>(63)</sup>

注49) 「教授過程は、子どもの中に一連の内的発達過程をひきおこす。つまりそれらの過程を生ぜしめ、始動させ、開始させるという意味においてひき起こすと、われわれには思われる。けれども教授によってひき起こされるこれらの内的発達過程と、学校の教授過程との間、およびそれらの力学の間には、<sup>パツレフィズム</sup>相同性は存在しない。それだからこそ、教育過程の児童学的分析の第一の課題は、学校の教授過程によってひき起こされ生み出される知的発達過程を解明することにあると私には思われる。したがってそれは……その発達の内的過程を解明することである。概して児童学的研究の対象となるものは、言うまでもなく教授法的分析ではなくて、発達の分析である。」(ヴィゴツキー『子どもの知的発達と教授』柴田・森岡訳、明治図書、30ページ)「われわれはつぎのように言うことができる。教育の過程というものがある。それは、自分自身の内部構造、順次性、展開の論理をもつ。その教育を受ける一人一人の生徒の内部、その頭のなかには、学校教育の過程でよび起こされ、動き出す、しかし自分自身の発達の論理をもった過程の内部的地下網のようなものがある。学校教育の心理学の基本的課題の一つは、あれこれの教育の過程でよび起こされる発達過程のこのような内部的論理、内部的進行を明らかにすることにある。」(ヴィゴツキー『思考と言語』下、87ページ)

50) コスチューク「ソビエト心理学における子どもの発達の問題」『心理学の諸問題』40, 1967. 6号, 所収(ロシア語原文27ページ)

51) レーニン「弁証法の問題によせて」『レーニン全集』第38巻, 327ページ

52) Akademie der Pädagogischen Wissenschaften der UdSSR.; *Allgemeine Grundlagen der Pädagogik*, Berlin 1972, Kapitel III Entwicklung und Erziehung, S. 137. (ソビエト教育学研究会訳『教育学原論』69~70ページ)

53) ルビンシュテイン『存在と意識』311ページ

54) 同上, 314ページ

55) ルビンシュテイン『心理学』上, 45ページ

56) ルビンシュテイン『存在と意識』315ページ

57) ルビンシュテイン『能力の問題と心理学理論の諸問題』7ページ

58) レオンチェフ『心理学における活動の問題』3~6ページ参照

59 「客観的現実の反映としてのあらゆる心理現象は、自己の対象によって決定されている。しかし心理現象の客観へのこの依存関係は、その成果としてこの現象が生まれるところの心理活動によって媒介されている。」（ルビンシュテイン『存在と意識』315ページ）

「心理現象を認識することは、この現象が反映する客体に対するその関係のなかでこの現象を明らみに出すことである。つまり客体の反映は、この客体を反映する主体、現実の個人の生活や活動に媒介されたものである。」（ルビンシュテイン『心理学』上、225ページ）

60 レオンチェフ『カール・マルクスと心理科学』秋山訳、224ページ

61 「外的な、感性的一実践的活動が、人間の活動の発生的に最初の、そして基本的な形式である。」（レオンチェフ『心理学における活動の問題』10ページ）

62 同上、14ページ

63 ルビンシュテイン『心理学』下、93ページ

## 5. 人格の発達と教育

人格の内的心理的発達過程をどのようにとらえるかという基本的問題における二つの相異なる見解が、人格理論あるいは人格と教育の問題にもたらす理論的結果はさまざまな面がある。ルビンシュテインは、外的諸条件の発達主体への影響を媒介するところの内的諸条件の総体を人格としてとらえた。このことは、人間の内的心理的発達及びそれとの関連において教育の役割を考えようとする場合には、何よりもまず発達主体に固有の人格に関する深い理解が不可欠であるということを示す。教育作用は、直接に機械的にその影響を児童・生徒に及ぼすことができるようなものではない。あらゆる教育活動の有効性は、被教育者の内的諸条件に媒介されるのであり、それ故「人間の精神的風格を形成するという仕事の成功は、……教育がどれだけこの内面的活動を刺激し、方向(64)を与えらるものとなっているかに左右される。」教師は、生徒の人格について十分に知っている必要がある。自分が教育的働きかけをする対象の、人格の基本的特徴をつかんでいなければ、自分の教育的働きかけを、より効果的なものにするために組織することは不可能であり、その結果と自分の働きかけとの相

互関連についても正しい適確な認識をもつことはできない。発達主体の人格、あるいはその発達主体を一個の独立した人格たらしめているところの内的諸特性と切り結ぶことなしには教育の過程は成り立ちえない<sup>(65)</sup>。

他方、レオンチェフらの「内面化」論によれば、人格の発達は、対象化されたものとして外的に存在している人間的諸能力を個人の内面において再生産することによって実現する。この「内面化」を実現するのは、外的なものを自分のものにする「獲得」活動である。この獲得活動はしかし、はじめは、発生的には、主体の内的諸条件に依存することのないものとして、外的に組織されなければならない。この獲得活動は、外的な、対象化された人間的諸力を「課題」として発達主体に提起することによって組織される<sup>(66)</sup>。それ故人格の発達は、より具体的には周囲の人々からの課題の提示と、その課題の学習という形態を通して実現する。そしてこの発達の過程全体を組織するのが教師であり周囲の人人からの課題の提供と主体によるその学習という過程こそ、レオンチェフらの考える教育の過程である。レオンチェフらにとって教育の過程はまさに「教授—学習」の過程である。この立場に立って子どもの発達に関する研究を展開するとすれば、その努力は論理必然的に、習得さるべき対象化された人間的諸能力＝学習対象の再編成及び再編成された学習内容の習得（獲得）過程の効果的な統制方法の追究、そしてこの条件の下での発達主体の活動の最大限の発揮の問題に向けられるであろう。だが、発達主体の内的諸条件の総体としての人格と直接切り結ぶことのないところで展開される「教授—学習」過程が、はたしてどのような人格をつくりあげることになるのであろうか。我々は「内面化」論が論理的にもたらす教育方法論における重大な弱点を適確につかんでおく必要がある。本小論はそのための一ステップである。

注64 ルビンシュテイン『心理学』上、192ページ

65 「われわれのもとではまだ、教育的作用は直接児童に投影されるなどという、素朴な機械論的な観念にもとづくことがしばしばある。このような考え方では、教授が教育的効果をあげる、すなわち知識を伝えるばかりでなく、思考をも発達さ



せ、教育が行動の規準を与えるばかりでなく、性格つまり、人が環境や、人が受ける作用にたいする内面的な態度をつくるために、特別に発達や形成を目的とする仕事をしたり、教育学的な活動をする必要がなくなる。」（同上、191ページ）

66 「人間の能力の歴史的発達の成果は、その能力を具象化する客観的な物質的文化現象と精神的文化現象において、たんに人間に与えられるのではなくて、課題として与えられる。」（レオンチェフ『人間と文化』102ページ）